

2023年度 第2回 入学試験問題

国 語 (50分)

解答はすべて解答用紙に記入しなさい。

一 次の文章——線のカタカナ部分を漢字に直しなさい。

- 1 ブンキ点にさしかかる。
- 2 ガクタイの演奏を聴きく。
- 3 ジヨウシツな手触てざわりの布。
- 4 花をソナえる。
- 5 キシヨウが激しい人。
- 6 友の作文をゼツサンする。
- 7 法律をジュンシユする。
- 8 兄はドウガンだ。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(句読点や記号も一字と数えます。)

大学に入学してきたばかりの大学1年生に、わたしはよくこんな話もしています。

高校時代までは、「やばい」とか「エモい」とか言っていたら、仲間内でコミュニケーションができたかもしれない。でも、大學生になったり、社会人になったりすれば、もうそれは通用しないのだ、と。

この社会には、世代も文化も、価値観も感受性も、自分とは全く異なる人たちがたくさんいます。社会に出れば、多くの人は、そんな多様な人たちとのコミュニケーションの場に A 投げ出されます。

それはつまり、ただ「やばい」とか「エモい」とか言うのではなく、何がどう「やばい」のか、「エモい」のか、言葉を尽くして伝えられるようになる必要があるということなのです。

いや、それは本当は、小中学生の頃ころから大事なことです。

何か言いたいことがあっても、それがうまく言葉にならないことにイライラした経験は、多くの人が持っているのではないかと思います。

だれかとのいざこざや喧嘩けんかの際、それは特に大きな問題をもたらしてしまうことがあります。お互たがいに、言葉を尽くして話し合えば理解し合えたかもしれない、落としたところを見つつけられたかもしれないのに、その「言葉」が見つからないために、イライラ

してつい暴力や安易な暴言などに訴えてしまうことがあるのです。小さな子どもが癩癩かんしやくを起こして暴れ回るのは、多くの場合、イライラを①(x)にして(y)ことができないからです。

逆に言えば、もしわたしたちが十分な言葉を持っていたなら、異なる他者との間に、より深い了解関係りようけいを築ける可能性が格段に高まるということです。

そのためにも、わたしたちは「言葉をためる」必要があります。自分の考えを、また感情を、もつとも的確な言葉に乗せて伝えられるように、たくさんの言葉を知る必要があるのです。

読書がすぐれているのは、試験のために単語カードを1枚1枚暗記するようなことは違ちがって、言葉を文脈の中で学んでいくことができる点にあります。なるほど、このような文脈において、こんなことが言いたい時は、この言葉を使えばいいんだな。そんなことを、わたしたちは読書を通して自然と学び取っていくことができるようになるのです。

言葉というのは不思議なもので、自分の中に十分にたまって、**a**器うつわからあふれるほどになれば、あとは自然と、口からすらすら出てくるだけ、という状態になるものです。あるいは、文章としてどンドン紡つむがれていくだけ、というような状態に。

それまでは上手にしゃべれなかった大学生が、読書を積むことで、1〜2年後には見違えるほどの言葉の使い手になった例を、わたしはたくさん見てきました。

もちろん、吃音きつおんやディスレクシア(読み書き障がい)など、言葉に関する障がいを持つ人も大勢いますから、このことを過度に一般化いっぽんかしてはなりません(一般化のワナですね)。でも、もしも何がしかの仕方、「言葉をためる」ことができれば、**言葉**^⑤があふれ出る「経験もまた、多くの人にきつと訪おとずれるのではないか」と思います。

bわたし自身は、幼い頃からかなり重度の過敏性腸症候群かびんせいちょうしやうこうぐんという一種の神経症に苦しめられていて、人前で話すことにはずいぶんと苦労してきました。

その名の通り、腸が超過敏で、ちょっとした不安や緊張を感じただけで、お腹なかが痛くなって下してしまうのです。思春期の頃は、冗談じゆうだんでなく1日に20回以上トイレに駆け込んでいました。電車やバスや飛行機に乗るためには、**i** **ii**の覚悟かくごを決めなければなりませんでした。

いま、月に何度も講演をしたり、テレビやラジオにも出たりしていますが、じつは本番前は、いつもお腹を下してずっとトイレに閉じこもっています(以前よりはずっとましになりましたが)。それでも、人前でお話することをいま比較的得意ひかくてきに思っているのは、やはり自分の中に「言葉」がたまっているからだと思います。言いたいことは的確に言えるし、何を聞かれてもだいたいはきつと答えられる。それだけの語彙ごいはためてきたし、それだけの思考は重ねてきた。そんな自信や安心感が得られているから、

人前で話すことを楽しめるようになったのだろうと思います。

と、それはともかく、こうやって「言葉をためる」経験、また、その言葉を「か交わし合う」経験を、わたしは多くの若い方たちにたっぷり積んでもらいたいと思っています。

(こまのいっせく 苦野一徳『未来のきみを変える読書術 なぜ本を読むのか?』筑摩書房より)

問一 空らん A に入る言葉として最もふさわしいものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

ア、おとなげなく イ、いやおうなく ウ、このうえなく エ、まんべんなく オ、くったくなく

問二 —線①「(x)にして(y)こと」とありますが、(x)、(y)に入るのにふさわしい言葉を答えなさい。
ただし、(x)は二字で文章中から探し、(y)は五字以内で自分で考えて答えること。

問三 —線②「異なる他者との間」とありますが、これと対照的に表現されている言葉をこれより前の文章中から三字で探し、抜き出して答えなさい。

問四 次の文は文章中から抜き出したものです。この文が入っていた場所の直後の五字を抜き出して答えなさい。

そのためのもつとも有効な方法が、やはり読書です。

問九 空らん i ii に漢字を一字ずつ入れると二字熟語になります。次のア～クの中から当てはまるものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア、決 イ、子 ウ、結 エ、私 オ、死 カ、潔 キ、詩 ク、血

問十 本文の内容に一致しているものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、「やばい」のような言葉に慣れると、正しい言葉が使えなくなる。
イ、言葉を学ぶことで、自分が無知であることを知ることができる。
ウ、言葉の力を高めれば、苦手だったことを克服することもできる。
エ、たくさん経験をすることで、多くの言葉を知ることができる。

三 次の記事を読んで、あとの問いに答えなさい。(句読点や記号も一字と数えます。)

「いつてきまーす」

お母さんが見えなくなるまで手をふって、^①ぼくは大通りに向かって歩き出す。

通りの入り口が見えてきたところで、ぼつんと人が立っていた。見覚えのある青のフードつきのパーカ。智博^{ともひろ}だ。

「おっす」

智博が片手をあげた。

「おはよう。どしたの、今日は早いじゃん」

「久しぶりに輝^{ひかる}をむかえにきたんだー」

いひひ、と智博は笑った。

「なんでおれがここで待ってたか、わかる？」

ぼくは首をふった。

「なに、わかんねえの？」

「わかんないよ。なんで？」

「おまえとママのじゃまをしたくなかったからだよ」

A と笑いながら、智博は言った。

② 「輝ちゃん、いつてらっしやーい」

わざと高い声で言うのと、ぼくに手をふりながら走り出した。

顔が赤くなっていくのがわかった。体温が^{じょうしょう}一気に上昇していく。はずかしいのか怒^{おこ}っているのか、自分でもわからなかった。

その日、ぼくは再び智博^③にからかわれて過^{すご}ごした。

もうとっくにあきてくれたと思^{おも}っていたのに。

「おれたち六年生になるのになー」

昼休みがおわって、五時間目の開始を待っているあいだに智博に言われた。

「六年生になるからなんなんだよ」

自分の席から言い返したら、

「中学生の一步手前じゃん」

と返された。

そりゃあ、そうかもしれないけど。

「ねえ！」

菜摘がわりこんできた。

廊下側の席に座る智博と、窓際の席に座るぼくたちのちょうど真ん中に立って、智博を B とにらむ。

「そりゃあって人を笑いものにするの、やめなさいってば！」

「うわっ、出た！」

智博が大げさにのけぞって、ガタンといすをゆらした。

「いいじゃない。マザコンだって。ねー？」

菜摘が言うと、ほかの女子も次々に応戦する。

「うん、マザコンでもいいと思う」

「男の人って、たいていマザコンらしいよ」

「あたしもお母さん好きだし」

ああ、もう。ぼくはマザコンじゃないってば！

ため息をついた。

「ていうかさ」

菜摘は智博に体を向けた。

「あんたはいつもそうやっていいかげんじゃん。昨日も整頓係の仕事はサボるし」

同じ二班の智博と菜摘は今週、整頓係だ。

「トイレ掃除のときはあたしたちが男子トイレに入れないからってサボるし、給食当番のときだって、自分はいつも簡単なものしか担当しないじゃん。そのくせ自分のお皿にはカレー多めに入れるし」

ぼくのことをかばってくれていたはずなのに、いつのまにか智博への批判にかわっている。

「そうそう」

「ずるいよねー」

二班の女子たちが口々に言う。

智博も、さすがに C と小さくなっている。智博には悪いけど、ぼくと祐希ゆうきは顔を見合わせて笑ってしまった。

「えー、ていうかさー。なんでおればっかり言われるわけえ？」

あまりにも情けない声だったので、みんな笑い出した。

ぼくがからかわれていたことなんて、たぶんみんな忘れてる。

菜摘も気がぬけたように笑って、智博もしてやったりと満足げだ。

ぼくは、香帆かほの言葉を思い返していた。

(あたしは、おかしいなんて思わない)

あのとき、香帆がそう言ってくれたから、ぼくもおかしくなんか無いって思えたんだ。

でも、最近はなんだか気持ちが悪くすつきりしない。どうしてだろう。

お母さんは、傷つくだろうか。

もし、ぼくが見送るのはもうやめてって言ったたら。

お父さん。ぼく、どうしたらいい？

お鈴りんを鳴らして、お父さんに問いかけてみる。

写真のお父さんは笑顔えがおのまま、なにもこたえてくれない。

「輝ちか、遅刻ちこくするよー、早くしなー」

「はーい」

結局、お母さんにはなにも言えずに、今日も家を出てきてしまった。

ぼくは、お母さんに言う言葉をいくつも考えていた。

(もう、見送りはしなくていいよ)

はつきり言えずるのは、よくないだろうか。

(ぼくって、四月からは六年生だよ)

遠まわしに言っても、伝わらないかもしれない。クラスのみんなにからかわれたことを、正直に話してみようか。
(ぼく、マザコンで言われたんだよ。それに、ぼくとお母さんはロミオとジュリエットみたいだって)
はあーっと、ため息をつく。

ぐずぐず悩んでいるあいだに、三学期はもうすぐおわりうとしていた。
「おじいちゃん。相談したいことがあるんだけど」

日曜日、ぼくはおじいちゃんといっしょに畑で過ごしたあと、おそるおそる相談事を持ちかけた。落ちつかなくて、意味もなくかかどで地面をぐりぐりと掘ったりする。

「ぜったいに内緒にしてくれる？」

「おっ」と、おじいちゃんの口元がほころぶ。

「なんだ、もう新しい好きな子ができたのか」

ぼくはあわてておじいちゃんを見あげた。

なんてことを言い出すんだ。

「そんなじゃないよ、もうっ」

ぼくが香帆を好きなことは、やっぱりバレバレなのか。

それにしたって、好きな女の子の話をおじいちゃんにするわけじゃないか。

二人でベンチに腰かけて、おじいちゃんに話しはじめた。

「学校でからかわれたこと。お母さんにやめたいと言えずに悩んでいることを打ち明けた。おじいちゃんはおごに手をあてて考
えこんだ。おじいちゃんの手は土でよごれていて、指先は茶色くそまっている。」

「輝はあまえん坊だったからなあ。千明さんも、大変だっただろうなあ」

ぼくは顔を赤くした。

自分でも、それはわかっている。

千明さんというのは、お母さんのことだ。お母さんのことを下の名前で呼ばれるのは、とたんに変な感じがする。

「おれは、やめなくてもいいと思うな」

おじいちゃんが言った。

「いいじゃないか。ぜんぜん、おかしくなんかないぞ。まわりの言葉や目を気にして、好きなことをやめる必要はないんだ。輝とお母さんの、大事な時間だろう」

「うん」

ぼくはあいまいにうなずいた。

香帆も、同じように言ってくれたんだ。

「他人のいじわるな言葉になんか、耳をかたむけなくてもいいんだ。なつ、輝」

「うん」

うつむいたぼくの顔を、おじいちゃんはそつとのぞきこむ。

ぼくは、自分の気持ちをどう言い表したらいいのかわからなくて、頭の中で必死に言葉を探した。

他人の言葉は気にしなくていいと、おじいちゃんは言う。そのとおりだとぼくも思う。

「ただ、違うんだ。たしかに、きっかけはみんなにからかわれたことだったかもしれない。みんなに笑われて、はずかしい思いをした。だけ。」

「そうじゃないんだ。まわりに言われたからじゃないんだ。ぼくは自分の意志で、やめたいんだ」

「そうだ。これはぼくの意志なんだ。ほかのだれでもない、ぼく自身の。」

「みんなに笑われたのはショックだったよ。でもなんていうか、ぼく自身がこういうのはおかしいんじゃないかって、思うようになったんだ。おかしいっていうのとは、違うかもしれない。その、なんていうか。いやだとか、はずかしいとかじゃなくて、今のぼくには、なんか違うっていうか」

⑥ サイズの合わない服を着ていて、気持ちよく体を動かさないような X。

「なんだろう、この気持ち。自分でもよくわからなくて、もやもやするんだ。」

「でもさ、お母さんを傷つけたらどうしようって、心配なんだよね」

「でも、やめる」

ぼくが言いきると、おじいちゃんはおもむろに立ちあがった。腕を組みながら、塀の向こうの桜の木を見あげる。長くのびた枝が敷地にかかり、毎年桜の花をながめることができるのだ。

枝のところどころには、ぶくつとふくらんだつぼみがならんでいる。薄紅色のつぼみは、春をとじこめたまま開く日をじっと待っている。

「なつかしいなあ」

「おじいちゃんがしみじみとつぶやいた。」

⑧ おじいちゃんの視線の先を追うと、その目は桜の枝のずっと向こう。うすい雲がとけた空を見ている。

「おじいちゃん、なにがなつかしいの？」

「ん、ああ、すまん」

「おじいちゃんはてれたように笑った。」

「渉のことを、思い出したんだよ」

「渉。お父さんの名前だ。」

「えっ、なんでなんで？ どうしてお父さんのこと思い出すの？」

「ぼくは興奮して、おじいちゃんのそでを引いた。お父さんの話を聞くとき、ぼくはいつも気持ちが高ぶってしまうんだ。」

「あのときの渉も、今の輝と同じくらいの年だったな」

「おじいちゃんは再びベンチに腰をおろすと、お父さんの思い出話をしてくれた。」

それは、体操着袋にまつわる話だった。

「お父さんが小学生のころ、体操着袋はお母さん、つまりぼくのおばあちゃんが手づくりでつくっていた。」

「お裁縫が得意なおばあちゃんは、学期が変わるたびに、お父さんの体操着袋をつくるのを、楽しみにしていたのだという。」

「W A T A R U」と、アププリケをつけたりパッチワークにしたり、ずいぶん手のこんだものをつくっていた。

「ただどある日、お父さんはおばあちゃんに宣言した。」

「もう手づくりしないでいいよ。自分で選んだのを買ってくるから」

「そう言ってお父さんは紺色の無地の袋を、自分のおこづかいで買って来てしまった。」

「おばあちゃん、ショック受けてた？」

「ああ、さみしそうにしてた」

「そうだな。」

「息子のためにやっていたことを、突然、もういいって言われたんだもん。」

「ぼくのお母さんは仕事でいそがしいし不器用だから、手づくりでなにかをつくってくれたことはない。ぼくは手づくりの体操着袋をうらやましく思った。」

「でも、お父さんはお父さんで、なにか思うところがあつたんだろう。ぼくみたいに、クラスメイトにからかわれたのかもしれない」

い。

それとも、アップリケのついた袋になにか X があつたのだろうか。ただ反抗はんこうしたかっただけ、ということも考えられる。

お父さんに聞いてみたい。

心の底からそう思った。

お父さんなら、今のぼくの気持ちもわかってくれるんじゃないだろうか。

「あのときの渉は、輝と同じ気持ちだったのかもしれないな」

おじいちゃんはやさしく笑い、その目にしっかりと映しこむようにぼくを見た。

なつかしい人を見つけたみたいに、目を細める。

おじいちゃんは、ぼくを見ながらぼくの中にお父さんを見ている。それがわかって、うれしいような、むずがゆいような気持ちになった。

「それに、渉はこんなことも言ってたんだ」

⑨ 「なんて言ったの？」

胸がふるえる。

「お母さんには悪いけど、大人になるんだ』ってな」

おじいちゃんの言葉が、午後の光の中にとけていく。

「どうだ、生意気なこと言うだろう？」

おじいちゃんほうれしそうに笑った。

うん、ほんとに生意気だと思った。

だって、ぼくたちはまだ小学生で、大人がいなくてなにができるだろう。

⑩ それでも、大人になる。

ぼくは大人になるんだ。

(葉山エミ はやま 『ベランダに手をふって』 講談社より)

問一 — 線①「ぼく」とありますが、ここでの「ぼく」が過ごしているのは何年生の何学期ですか。次の文の空らんア・イに入る適当な言葉を答えなさい。ただし、アは漢字三字、イは漢字一字とします。

() ア () 年生の () イ () 学期

問二 空らん A、B、C に入る最もふさわしい言葉を次のア～カの中から選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ記号をくり返すことはできません。

ア、えへん イ、しゅん ウ、ホツ エ、ドツ オ、キツ カ、にやり

問三 — 線②「わざと高い声で言う」とありますが、だれがだれの声をまねして「高い声」を出しているのですか。一文にまとめて答えなさい。

問四 — 線③「智博にからかわれて過ごした」とありますが、「智博」に何と言って「からかわれて」いると予想できますか。からかいの言葉を四字で文章中から探し、抜き出して答えなさい。

問五 — 線④ 「してやったり」とありますが、ここでの「智博」の気持ちを説明したものとして最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア、仕事をサボったり、ずるしたことを忘れさせることに成功したという気持ち。
イ、輝をからかうという方向にみんなを巻きこむことに成功したという気持ち。
ウ、みんなを笑わせることで自分への追及から逃れることに成功したという気持ち。
エ、輝をかばうために、あえて自分が笑い者になることに成功したという気持ち。

問六 — 線⑤ 「お母さんにやめたいと言えずに悩んでいる」とありますが、それはなぜですか。次の文の空らんに入る言葉を十五字以上二十字以内で文章中から探し、始めと終わりの五字を抜き出して答えなさい。

やめたいと言うことで () に思うから。

問七 空らん X に入る最もふさわしい言葉を次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

- ア、嫌悪感 イ、違和感 ウ、脱力感 エ、失望感 オ、圧迫感

問八 — 線⑥ 「なんだろう、この気持ち。自分でもよくわからなくて、もやもやする」とありますが、「この気持ち」とはどんな気持ちですか。「おじいちゃん」が話す「お父さん」の話と重ねて「くではなくくと思う気持ち」という形にまとめて説明しなさい。ただし、「朝の見送り」という言葉を必ず用いること。

問九 — 線⑦ 「おもむろに」の意味として最もふさわしいものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

ア、急いで イ、ゆつくりと ウ、不満そうに エ、面白おもしろそうに オ、こわごわと

問十 — 線⑧ 「おじいちゃんの視線の先を追うと、その目は桜の枝のずっと向こう。うすい雲がとけた空を見ている」とありますが、「おじいちゃん」は「視線の先」にだれを見ているのですか。「おじいちゃん」にとってどういう人か分かるように四字以上十字以内で答えなさい。

問十一 — 線⑨ 「胸がふるえる」とありますが、それはなぜですか。理由として最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア、お父さんの思い出話を聞くことができるとても感動したから。
イ、お父さんと気持ちはずれているのではないかと恐怖きょうふしたから。
ウ、お父さんがどんな言葉を口にしたのか気になって興奮きんぷんしたから。
エ、自分の心の中にいるお父さんが声を出そうとして緊張きんちやうしたから。

問十二 — 線⑩ 「ぼくは大人になるんだ」とありますが、「ぼく」は「大人になる」一歩手前であることが分かります。このような「ぼく」の様子を表す連続する二文の風景描写びやうしやを文章中から探し、一文目の始めの五字を抜き出して答えなさい。

以下
余
白

